

Ⅱ 特別連載 Ⅱ

科学技術 振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第330回

さくらサイエンス・ハイスクールプログラム

第4陣 アジア、中南米の6カ国から高校生が来日

11月27日から12月3日の日程で、今年度4グループ目となる「さくらサイエンス・ハイスクールプログラム」が実施された。今回来日したのはアルゼンチン、コロンビア、モルデイブ、マーシャル諸島、ミクロネシア、ウズベキスタンからの高校生18名と引率者12名の計30名。高校生たちは、いずれも各国政府機関に依頼して選抜された優秀な生徒たちである。以下、主な訪問先での活動の様子を紹介する。

挙げようとすると、その意志をHALが読み取り、同様の動きをする。腕を掴んだり、太ももの裏に当てがうなど、腕を挙げられない状態で、腕を挙げようとしてもHALは反応する。脳からの信号をHALが読み取っている証左だ。体験ではスマートフォン等で動画を撮影しながら、その動きに歓声をあげたり、感心したりする様子が見られた。

■ 東工大で
キャンパスライフをイメージ

11月30日午後、東京工業大学大岡山キャンパスを訪問した。劇場型の講義施設「レクチャシアター」では、前方2面に設置されたスクリーンにダイナミックに映し出される資料や映像とともに、工藤明特命教授の講義「Medaka fish want to space」を受講した。3000匹のメダカたちの中から、無重力状態で耐えられるメダカ24匹を選別した方法や、宇宙でのメダカの様子などの興味深い内容に引き込まれた。

■ サイバーデザインスタジオで
HALの動作原理を体験

11月29日午後、CYBERDYNE STUDIO（つくば市）を訪問した。CYBERDYNE社の設立経緯や理念、主力製品「HAL」の開発や動作原理について、展示を見学しながら説明を受けた後、実際に二の腕にセンサーを装着して動作を体験した。肘を曲げて前腕を



HALの動作原理を体験



まずは自己紹介(多摩高校)



留学生と記念撮影(東工大)



藤嶋先生の特別講義

地球生命研究所（ELSI）では、構成員の約半数が海外からの研究者という、インターナショナルな環境であることが紹介され、木の温もりを感じる講義室で、黒川宏之特任准教授の生命の起源に関する講義に目を輝かせながら耳を傾けた。最後に行われた留学生との交流も充実した時間となり、東工大での留学生生活をイメージすることができた。

■ 多摩高校を訪問
藤嶋昭先生の特別講義

来日5日目の12月1日には神奈川県立多摩高等学校（川崎市）を訪問し、1年生の化学や英語の授業を体験したほか、東京理科大学栄誉教授の藤嶋昭氏の「光触媒」に関する講演と一緒に聴講するなどの交流を行った。

化学の授業では「飲み物などを利用して電池を作ってみよう」というテーマで、多摩高校生たちが「コーラ」や「爽健美茶」などの液体の成分について調べてきたことを英語で発表した後、様々な液体が通電するかどうかの実験を行った。英語の授業では、各クラスで企画をした、



さくらサイエンスプログラム

台湾同窓会をオンライン開催

科学技術振興機構（JST）と台湾同窓会の共催で11月26日、第1回台湾さくらサイエンスクラブ同窓会「Tie-up with Taiwan! Sakura Science Club brings us closer」が世界16カ国の同窓生137名の参加者によりオンラインで開催された。写真。

今回は初めての台湾同窓会会合となるもので、同窓会幹事であるMr. WTU, Chia-Hungが司会を務めた。

● 開会

冒頭、台湾同窓会代表としてDr. PENG, Chi-How 同窓会幹事長の挨拶が行われた。次に岸輝雄JSTさくらサイエンスプログラム推進本部長からの挨拶が行われ、多くの参加者がこの同窓会を楽しみ、同窓会の活動によ

楽しいゲームで大いに盛り上がり、ランチの後には書道体験も行われた。

藤嶋氏の講演「How to Get Clean World: Photocatalysis and Carbon Recycling」の質疑応答では、「光触媒は産業にも利用できるのか?」「酸化チタンの触媒反応には何が必要か?」など、積極的な手を挙げてたくさん質問を投げかけていた。

一日をおとした活動で高校生同士の絆が深まり、心温まる交流となった。

■ 修了式

帰国前日の12月2日、日本科学未来館で修了式が実施された。ハサン・ソービル駐日モルディブ共和国大使、アレキサンダー・シー・ビング駐日マーシャル諸島共和国大使、ジョン・フリッツ駐日ミクロネシア連邦大使をはじめ、各国大使館、外務省、文部科学省からも参加があった。各国代表の高校生スピーチでは、感謝の言葉とともに、「人生を変える経験になった」「将来、留学生として日本にもどりたい」「科学をおしてより良い世界をつくっていくことに、貢献したい」など前向きな言葉が聞かれた。

り同窓生の今後の人生とキャリアに新しい道が切り開かれていくことを期待する旨が述べられた。続いて古屋圭司衆議院議員（日華議員懇談会会長）から、さくらサイエンスプログラム（SSP）と台湾同窓会の今後の発展に向けて祝辞と激励の言葉があった。また、謝長廷台北駐日経済文化代表処駐日代表からは桜の花のように一輪ではなく多くの若者の交流により満開の桜となっていくことへの期待が述べられた。そして泉裕泰日本台湾交流協会台北事務所代表からは相互補完関係にある日・台の交流の有意義性が述べられ、同協会の日本留学奨学金事業の紹介も行われた。

● 基調講演

最初に内山英穂横浜市立大学教授から講演があり、内山教授がSSPにより台湾から優秀な若者を受け入れた経験とその内容が紹介され、SSPが日台交流の強化に役立っていることが述べられた。次に周洵国立中興大学助教授が登壇し、SSPでの訪日の事例が紹介され、SSPで日本人研究者と知り合ったことのメリットが述べられ、日本への博士課程留学につながったことや今後の日台交流の促進に協力する旨が述べられた。

● 同窓生からの発表

SSPで訪日した同窓生3名から、各同窓生のSSPでの訪日の内容が紹介され、現在取り組んでいる研究の紹介と日本との交流の継続、科学技術の国際交流の有益性等が発表された。また、日本学生支援機構（JASSO）から日本への留学について申請方法等、具体的で有益な情報提供が行われた。

● 閉会

伊藤宗太郎JSTさくらサイエンスプログラム推進本部企画運営室長よりこの日の同窓会を通じて将来に向けてネットワークが強化され、同窓会会員が学生、研究者、またはビジネスパーソンとして再び日本に来ることを期待している旨が述べられた。